

『理趣広経』のプダク写本と『吉祥最勝本初広釈』との関連性について

徳 重 弘 志

1. はじめに

『理趣広経』（ŚP）は、「般若分（大樂金剛不空三昧耶）」（ŚP I）、「真言分・大樂金剛秘密」（ŚP II）、「真言分・吉祥最勝本初」（ŚP III）といった段階的に成立した 3 編が、後代に一つに統合された経典である¹⁾。ŚP のチベット大蔵経諸版のうち、ŚP II と ŚP III に属する幾つかの章においては、プダク写本（Ph）²⁾ の読みがツェルパ系統やテンパンマ系統とは大幅に異なっている。本稿では、ŚP のチベット大蔵経諸版の読みと、ŚP の註釈書である『吉祥最勝本初広釈』（*Tikā*）における本経典からの引用文とを比較することで、Ph が他の諸版とは異なる原因について解明を試みた。

2. 「真言分・大樂金剛秘密」における用例

ŚP II に関しては、チベット語訳のみが現存している。また、ŚP II では、複数の章において Ph の読みが他の系統とは大幅に異なっている。そのうち、ŚP II の第 1 章³⁾における相違に関しては拙稿⁴⁾で既に指摘したので、本稿では ŚP II の第 2 章⁵⁾における相違に関して考察を行う。

まず、ŚP II の第 2 章における Ph と他の諸版とが顕著に相違している記述と、それに対応する *Tikā* に引用された ŚP の記述とを、以下に示しておく。なお、以下の用例では、下線が Ph と他の諸版の読みが一致しない箇所を、**ボールド体**が ŚP の記述と *Tikā* における引用文とが一致する箇所を、それぞれ示している。

用例 1

[Ph]⁶⁾

bcom ldan 'das rnam par snang mdzad chen po de bzhin gshegs pa thams cad kyi sku dang /

[Ph 以外の諸版]⁷⁾

bcom ldan 'das kyi sku dang

(102) 『理趣広経』のプダク写本と『吉祥最勝本初広釈』との関連性について（徳 重）

[*Ṭikā*] ⁸⁾

bcom ldan 'das de bzhin gshegs pa rnam par snang mdzad chen po byang chub mchog gi phyag rgya phyag gnyis kyis bcings nas /

用例 2

[Ph] ⁹⁾

de bzhin gshegs pa sras dang bcas pa thams cad byon zhing 'dus nas brtan par gyur pa dang /
thams cad grub pa'i phyir dkyil 'khor chen po'i tshul zhugs te /

[Ph 以外の諸版] ¹⁰⁾

sangs rgyas **sras dang bcas pa kun // kun nas 'dus shing bstan** par 'gyur ¹¹⁾ // **dkyil 'khor chen po'i**
sbyor ba yis // thams cad grub phyir kun nas bzhugs //

[*Ṭikā*] ¹²⁾

[...] **de bzhin gshegs pa sras dang bcas pa** [...] bskul bar gyur pas ¹³⁾ **'dus par mdzad do //**
brtan pa ni mi phyed pa'o // [...] **thams cad grub pa'i phyir dkyil 'khor chen po'i tshul** gyis
zhugs so zhes bya ba ni /

以上の用例では、Ph にのみ存在する読みが、*Ṭikā* に引用された ŚP の記述と一致している。さらに、ŚP II の第 1 章においても、同一の傾向を示す用例が存在する。このことから、Ph と他の諸版とではサンスクリット原典が異なっており、*Ṭikā* に引用された ŚP は Ph と同一の原典に基づいていると推定できる。

ここで問題となるのが、ŚP のチベット大蔵経諸版では、ŚP I の奥書には Śrad-dhākaravarman と Rin chen bzang po が翻訳者であり、ŚP III の奥書には Mantrakālaśa と lHa btsan po Shi ba 'od が翻訳者であると、共通して記されていることである。これに関しては、ŚP III の奥書に Shi ba 'od が翻訳したと記されていても、それが Ph における ŚP II の翻訳者も Shi ba 'od であるという根拠とはなりえないと判断できる。

さらに、Ph と他の諸版の原典が異なることを裏付ける記述が、Shi ba 'od に関する伝記に存在する。具体的には、ŚP 全体を Rin chen bzang po が翻訳したが、ŚP II と ŚP III に関してはサンスクリット原典の欠落箇所を残したままの「未完訳本」であったため、彼の死後に Shi ba 'od が新たな原典を入手して、その欠落を補った「完訳本」を作成したという経緯がある。また、Rin chen bzang po は *Ṭikā* も翻訳しているが、この註釈書も「未完訳本」と同様に原典の欠落箇所を残していると伝えられている ¹⁴⁾。

以上のことから、ŚP II に関しては、Ph 以外の諸版が Shi ba 'od による「完訳本」

『理趣広経』のブダク写本と『吉祥最勝本初広釈』との関連性について（徳 重） （103）

であるのに対して、Ph は従来未発見であった Rin chen bzang po による「未完訳本」である可能性が高いと判断できる。

3. 「真言分・吉祥最勝本初」における用例

ŚP III に関しては、チベット語訳と漢訳が現存している。また、ŚP III では、その第 17 章¹⁵⁾における Ph の読みが、他の系統とは大幅に異なっている。まず、ŚP III の第 17 章における Ph と他の諸版とが顕著に相違している記述と、それに対応する *Ṭikā* に引用された ŚP の記述とを、以下に示しておく。

用例 3

[Ph]¹⁶⁾

kun bde bde ba bla na med /

[Ph 以外の諸版]¹⁷⁾

dn̄gos grub kun gyi¹⁸⁾ bde ba'i mchog /

[*Ṭikā*]¹⁹⁾

dn̄gos grub kun gyi bde ba'i mchog /

用例 4

[Ph]²⁰⁾

rdo rje sems dpa' ci rigs par //

[Ph 以外の諸版]²¹⁾

rdo rje sems dpas gsungs pa bzhin // ma grub²²⁾ rnams kyang²³⁾ grub par 'gyur //

[*Ṭikā*]²⁴⁾

ma grub rnams kyang 'grub par 'gyur // [...] rdo rje sems dpas gsungs pa bzhin²⁵⁾ //

以上の用例では、Ph 以外の諸版にのみ存在する読みが、*Ṭikā* に引用された ŚP の記述と一致している。さらに、当該の章全体に、同一の傾向を示す多数の用例が存在する。これについては、次の 2 つの可能性が想定できる。一方は、ŚP III に関しては、Rin chen bzang po が依拠した *Ṭikā* の原典と、Shi ba 'od が依拠した原典が、ほぼ同一の内容だという可能性である。他方は、Shi ba 'od が「完訳本」を作成する過程において、Rin chen bzang po が翻訳した *Ṭikā* を参照し、訳文にその影響を受けたという可能性である。これに関連して、ŚP II の第 2 章においても、Ph と他の諸版とに共通して存在する記述のうち、Ph 以外の諸版における読みの方が、*Ṭikā* に引用された ŚP の記述と一致している用例が存在する。このことから、Shi ba 'od が *Ṭikā* の影響を受けた可能性が高いと判断できる。

(104) 『理趣広経』のプダク写本と『吉祥最勝本初広釈』との関連性について(徳 重)

また、PhにおけるŚP IIIは、ŚP IIの場合とは異なり、*Tikā*に引用されたŚPの記述とは読みが一致しない。さらに、PhにおけるŚP IIIの奥書には、他の諸版と同様にShi ba 'odによる翻訳であると記されている。この問題に関しては、次の2つの可能性が想定できる。一方は、PhにおけるŚP IIIは、他の諸版と同様にShi ba 'odによる「完訳本」であるが、何らかの原因により特異な読みに変化したという可能性である。他方は、Shi ba 'odが複数のサンスクリット原典を入手しており、「完訳本」とは異なる原典からの翻訳も存在し、それがPhに収められているという可能性である。この問題に関しては、今後の課題としたい。

4. おわりに

本稿では、ŚP IIとŚP IIIに属する幾つかの章におけるPhの読みが、他の諸版とは異なる原因について解明を試みた。調査の結果、ŚP IIにおいては、Phにのみ存在する読みが、*Tikā*に引用されたŚPの記述と一致していることが判明した。このことから、PhにおけるŚP IIは、従来未発見であったRin chen bzang poによる「未完訳本」である可能性が高いと判断できる。

他方、ŚP IIIの第17章においては、Ph以外の諸版にのみ存在する読みが、*Tikā*に引用されたŚPの記述と一致していることが判明した。このことから、PhにおけるŚP IIIの第17章は、Shi ba 'odによる「完訳本」が何らかの原因により特異な読みに変化したか、あるいはShi ba 'odが「完訳本」とは異なるサンスクリット原典から翻訳を行ったと推測できる。

また、Phの読みと*Tikā*に引用されたŚPの記述が、ŚP IIにおいては一致し、ŚP IIIにおいては一致しないことについては、Phにおいては、Rin chen bzang po訳のŚP IおよびŚP IIと、Shi ba 'od訳のŚP IIIといった3編が統合されていることが原因であると推測できる。

1) これについては、福田[1987: 83-104]を参照。

2) Phは、他の諸版とはサンスクリット原典が異なっていた可能性が指摘されている。これについては、佐藤[2008: 76-77]を参照。

3) D no. 488, *ta* 176a3-177b5; P no. 120, *ta* 181b1-183a5; Ph no. 477, *tha* 133a6-135b7. なお、紙幅の都合上、これら以外の諸版の位置については省略した。

4) これについては、拙稿(徳重[2013], [2014])を参照されたい。

5) D no. 488, *ta* 181a5-182a4; P no. 120, *ta* 187a5-188a5; Ph no. 477, *tha* 141a2-142a6. なお、『中華大藏経・甘珠爾』の註記には永楽版の読みも記されているが、Dとは異なる読みだけを註記するという編集方針が採られている。そのため、本稿で扱った用例の異読に関しては、永楽版の読みが明示されていないため、本稿では永楽版を扱わないことにした。

『理趣広経』のプダク写本と『吉祥最勝本初広釈』との関連性について（徳 重） （105）

- 6) *Ph tha* 141a5–6. 7) *D ta* 181a7–b1; *P ta* 187a8. 8) 『丹珠爾』, vol. 30: 813.
 9) *Ph tha* 141a7–b1. 10) *D ta* 181b1–2; *P ta* 187b1–2. 11) 'gyur] C D J P U:
 gyur H L N S T. 12) 『丹珠爾』, vol. 30: 813–814. 13) gyur pas] C D: 'gyur bas
 N P. 14) これについては、川越 [1984: (115)] を参照。なお、この記述に関しては、
 高野山大学の藤田光寛教授よりご指摘いただいた。記して感謝いたします。
 15) *D no.* 488, *ta* 223b6–227b7; *P no.* 120, *ta* 232b8–237a2; *Ph no.* 477, *tha* 208a4–214a1.
 16) *Ph tha* 208b3. 17) *D ta* 224a4; *P ta* 233a6. 18) gyi] C D H J P U: gyis L N
 S T. 19) 『丹珠爾』, vol. 31: 33. 20) *Ph tha* 211a2. 21) *D ta* 225b6; *P ta*
 234b8. 22) grub] C D H J P S T U: sgrub L N. 23) kyang] C D H J N P S T U:
 kying L. 24) 『丹珠爾』, vol. 31: 49. 25) bzhin] C D: yin N P.

〈略号と参考文献〉

C: チョネ版. D: デルゲ版. H: ラサ版. J: ジャンサタム／リタン版. L: ロンドン／
 シェルカル写本. N: ナルタン版. P: 北京版. Ph: プダク写本. S: トクパレス写本.
 ŚP: 『理趣広経』 (*Śrīparamādyā*): *D nos.* 487–488; *P nos.* 119–120; 『中華大蔵経・甘珠爾』,
 vol. 85, 447–800. ŚP I: 『理趣広経』「般若分」. ŚP II: 『理趣広経』「真言分・大楽金剛秘
 密」. ŚP III: 『理趣広経』「真言分・吉祥最勝本初」. T: 東京写本. *Ṭkā*: 『吉祥最勝本初
 広釈』 (*Śrīparamādyā-ṭkā*): *D no.* 2512; *P no.* 3335; 『中華大蔵経・丹珠爾』, vols. 30–31,
 134–1547, 3–502. U: ウルガ版. 川越 1984: 川越英真「rNog Blo ldan śes rab と彼をめぐ
 る人々」(『印度学仏教学研究』32-2, 1984, (114)–(118)). 佐藤 2008: 佐藤直実『蔵漢
 訳『阿闍梨国経』研究』(山喜房佛書林, 2008). 徳重 2013: 徳重弘志「『理趣広経』の
 灌頂における阿闍梨の作法について」(『印度学仏教学研究』62-1, 2013, (97)–(101)).
 徳重 2014: 徳重弘志「『理趣広経』「極喜金剛秘密の供養の廣大儀軌」における灌頂——
 和訳および校訂テキスト——」(『高野山大学密教文化研究所紀要』27, 2014, (121)–
 (139)). 福田 1987: 福田亮成『理趣経の研究——その成立と展開——』(国書刊行会,
 1987). 『丹珠爾』: 『中華大蔵経・丹珠爾』.

〈キーワード〉 『理趣広経』, 『吉祥最勝本初広釈』, プダク写本, リンチェンサンポ
 (高野山大学密教文化研究所受託研究員, 博士(密教学))